牛寺（ごでら）遺跡（本発掘調査B）

調査地点（1/2.5万「豊田南」）

所在地　豊田市野見町一丁目地内
（北緯35度04分23秒　東経137度10分23秒）

調査理由　矢作川河川改修(河道掘削)

調査期間　令和3年10月～令和4年2月

調査面積　2,800㎡

担当者　堀木真美子・永井宏幸・池本正明

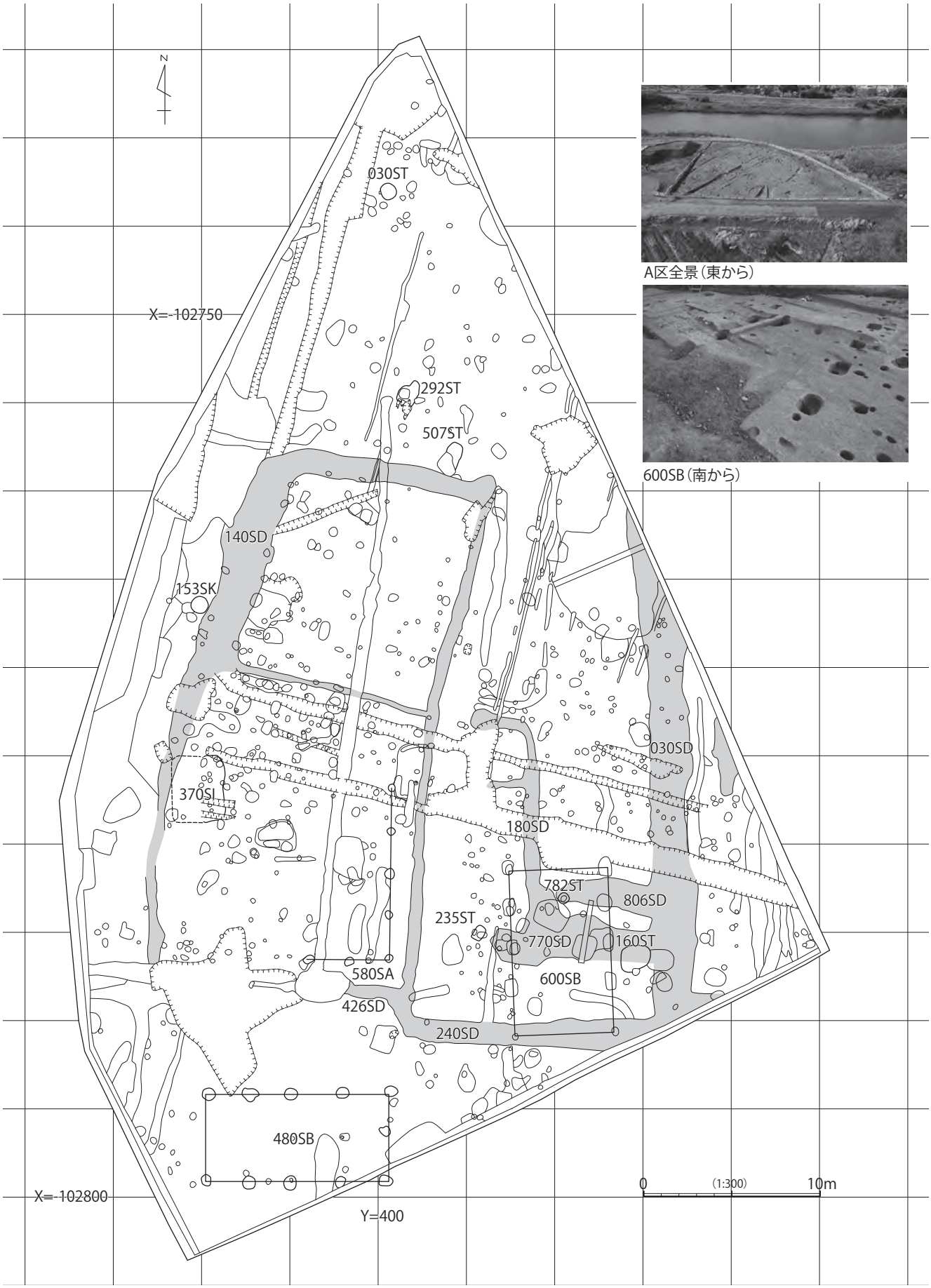
調査の経過　調査は国土交通省中部地方整備局豊橋河川事務所による矢作川河川改修に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。今回の調査区は遺跡の西側部分に該当し、標高は約38m。調査面積は2,800㎡である。

立地と環境　遺跡は矢作川左岸の段丘低位面に位置する。西側には矢作川が流れ、東側は小河川により開析されている関係から、幅約200m、長さ約700m程度の南側に伸びる半島状の地形となっており、遺跡は基部の西側に位置している。

牛寺遺跡の発掘調査は今回で4回目となる。最初の調査は1991（平成3）年で、豊田市教育委員会により実施され、中世の柵列・溝などが確認されている。続く2005(平成17)年と2018(平成30)年の調査は本センターにより実施されたもので、前者は縄文時代中期の土器敷炉や弥生時代後期の竪穴建物、中世の土坑・溝などが確認され、後者は古代・中世の土坑・溝などが検出されている。

調査の概要　ここではA区(1,700㎡)の成果を概観する。縄文時代晩期の土坑(153SK)や、弥生時代後期の竪穴建物(370SB)なども検出されているが、概ね15・16世紀に重心を持つ中世の遺構が中心となる。調査区を見渡すと、全域に溝が展開する事が確認でき、特に140SD・426SDによる東西15m、南北30mの区画が注目される。南東隅には柵列(580SA)も検出されている。内側には直径30㎝前後の土坑が多数存在し、掘立柱建物が存在した可能性も考えられる。この区画の南と東側には、主軸が直交するやや大型の掘立柱建物が２棟(480SB・600SB)も検出されている。次に、調査区の北側と東側では、火葬施設とこれに関連する遺構が点在している。遺構の平面形や埋土の様相は様々だが、床面が被熱し埋土に焼骨を多量に含む782ST、床面の被熱は観察できないが、埋土に焼土塊・炭化材・焼骨の小片を含む292STなどが特徴的となる。

ま と め　主要遺構の変遷を考えると、今回検出された遺構は、大まかに三つのグループに大別できる。まず大型建物だが主軸が直交し、両者は有機的関連性を想定でき、600SBの柱穴が240SD・770SD・806SDなどに覆われている。次に区画溝は、溝の接続部分で切り合いが観察できないため、少なくとも埋没はほぼ同時期と考えられる。次に、火葬施設とこれに関連する遺構は、性格上ほぼ同一時期に収まるものと仮定した場合、160STが770SD、782STが806SDの上面から確認できるため、溝による区画の終焉後にこれらが稼働したものと考えられる。現状では出土遺物の十分な検討を加えていないが、溝による区画が15世紀頃、大型掘立柱建物がこれに先行し、火葬施設とこれに関連する遺構は、溝により区画される遺構群の終焉後の16世紀頃と想定できる。（池本正明）



A区全景（東から）

600SB（南から）

主要遺構図（S=1/300）